

校友会報 119



KOGAKUIN UNIVERSITY

目次

つぎは八王子です 南雲 芳夫..... 1	南太平洋フィジー諸島の集落・住居の 研究から 萩原 正三..... 5	支部だより.....14 事業報告、予算、決算.....17 総会開催のお知らせ.....19 お知らせ.....20 第13回全国大会(島根大会)のお知らせ.....22
学園創立111年目に入って 北郷 薫..... 2	学園だより 長嶋 秀世..... 9	
校友会創立100周年という大きな節目を 来年に控えて 丹羽 宏之..... 3	中学校、高等学校の将来構想 城戸 一夫.....12	



「つぎは八王子です」

校友会会長 南雲 芳夫

皆様、如何お過ごしでしょうか。私の郷里新潟からも隣の雑木林のフキノトウが咲き乱れて、いつもの早春の風景が又やって来たと便りがありました。季節は有り難いことにいつもの春を人間に用意してくれているようです。然し、人間の社会では後ろ向きの騒ぎばかり続いていて、いつになったら私達の社会が前を向いて歩き出すのでしょうか。会員各位の御活躍振りに思いを馳せながら、ご苦勞の多いことだろうと、でも、工学院の同学だけは頑張っておられるだろうと、念じております。

この度三期目の校友会長をお引き受けすることになりました。逡巡するところがあったのですが、お引き受けした以上はなすべき事をなして、早くバトンタッチせねばと身を引き締めております。

今年度の入試も無事済み、十八才人口が激減し、当然軒並み受験生が減少するはずの所、工学院は幸いにもその影響を受けていません。うれしい限りです。これが、一時的な現象ではなく持続していくことを願うものですし、そうであってはじめて我等が工学院の社会的評価が定着してくるものと思います。

ここ一・二年、工学院は内外こぞって新宿校地の記念事業に専念して参りました。そして理事長、学長を先頭にして新宿テクノキャンパスは見事に、見違えるばかりに、時代に相応しい新しき革袋に蘇りました。つぎは八王子の再開発です。全学園を21世紀へ向って発展させる『ジャンプ21』計画も三年目に入ります。校友会もこの事柄に具体的に取り組みねばなりません。校友会として何が出来るか、全国の校友諸氏と相談をしながら内容を固めていきたいと思っておりますが、さしあたり、関係者が無理なく寄付できる形での資金集めの方法をご相談申し上げたい。負担を少なく、そして一回切りというのではなく、長く持続的な寄付をして頂けるような、多くの方が賛成していただける方途はないものかと、アドバイスを頂きたいと思っております。

工学院が社会に貢献できるとすれば、他の大学の真似ではない、それとは異なる百年以上に亘る私学としての歴史を踏まえた固有の何かが必要ですし、それを育てないような、よその価値をそのまま有り難がるようなことをしていたら学生に簡単に見放されてしまいます。生活実感に根ざした目標を有する教育の機関でありたいと念じ、それに向かって卒業生諸氏の一層の御尽力をお願いしたいと存じます。

下記の方々が、校友会の常任理事です。ご支援をお願いします。



総務担当副会長
恒松 良一



財務担当副会長
片岡 国幸



広報担当副会長
寺島 敬二



企画担当副会長
吉岡 陽一



事業担当副会長
杉山 助一



組織担当副会長
高木 雅行



総務部長
宮澤 正義



財務部長
渡辺 征一郎



広報部長
太田 雅康



企画部長
山田 文昭



事業部長
谷口 宗彦



組織部長
松島 迪夫

•ごあいさつ



学園創立111年目に入って

理事長 北郷 薫

校友の皆様方におかれましては、ご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。

昨年(平成9年)の10月31日には、本学園は、学園創立110周年記念日を迎え、記念式典を挙行致しました。同式典においては、例年のとおり、永年勤続の教職員の方々、成績優秀の学生・生徒諸君の表彰に加えて、学園創立110周年という特別の年であることを記念して、最近10年において本学園の発展に多大の貢献をされました、伊藤鄭爾元学長、高山英華元理事長、故・松浦雄雄元常務理事、田中博國元理事および、校友会(会長：南雲芳夫氏)、大学、専門学校の各後援会、附属高等学校PTAに感謝状を贈呈致しました。

翌日の11月1日には、本学園関係者だけでなく、本学園がご指導をいただいている諸官庁、友好関係にある諸学園、諸企業の方々をご招待して、「学園創立110周年・記念講演会ならびに祝賀会」を3年前に完成した本学園の新宿・新校舎において挙行致しました。

講演会の講師は、理化学研究所・理事長、元東京大学総長・有馬朗人先生にご依頼し、演題は「21世紀を展望した教育」とさせていただきました。有馬先生におかれましては中央教育審議会会長等の要職にあり、極めて多忙であるにもかかわらず、本学園の依頼を快諾され、約1時間半にわたり、熱気あふれるお話を聴かせて下さいました。

有馬先生は、優れた研究者であると同時に、優れた教育者であり、お話の内容は貴重な示唆に富み、本学園がこれから21世紀に向けて展開しようとしている教育活動の強化に大きく役立ち、私達の自信を深めました。有馬先生に厚く御礼申し上げます。

すでに、前年度の本会報(118号)で報告してありますように、本学園は「学園5ヶ年計画-ジャンプ21」と名付けている計画(1996年~2000年)を実行中であります。この計画の成果として、八王子校地に新しい研究棟、教室棟等が本年度から建設される予定です。

どうか校友の皆様方におかれましては、本学園の大学院、大学学部、専門学校、附属高等学校、同中学校に対して、これまで通り、ご支援下さいまようお願いします。

本学園の校友の皆様方が社会において立派な活躍をされていることが、各種の調査機関の発表により明らかにされています。私たちにとりまして、校友の皆様方の活躍を見るのが大きな喜びであります。

校友の皆様方の益々のご健勝とご活躍をお祈り申し上げます。



校友会創立100周年という 大きな節目を来年に控えて

校友会名誉会長・丹羽国際特許事務所長
丹羽 宏之

今を去る9年前の1989年（平成元年）11月11日、母校工学院大学学園の再開発事業の第1期工事で完成した29階建ての超高層ビル（大学棟）において、我が校友会の輝ける創立90周年の記念式典および祝賀会が、学園当局者を始め多くのご来賓各位の列席の下に、盛大に挙行されたことは、まだ記憶に新しい処である。

再開発前の学園母校の当時の新宿キャンパスは、昭和3年竣工の当時としては、近代的建築であったが、既に60年以上も経過した謂わば歴史的遺物に近くなっており、一部、増改築がなされたとはいえ研究施設など、些か老朽化した感を禁じ得ず、遠からず、取壊し再建という命題を抱えていた時期でもあった。

しかも、学園を取り巻く地域環境とは謂えば、京王プラザホテルを始めとするヒルトンホテルなどの超高層ホテル群、そして新宿センタービルや、新宿三井ビル、新宿住友ビルなどの超高層オフィスビル群、さらには、その後建設された東京都新庁舎建設予定地など、新宿西口は日本で唯一の超高層ビル街を形成し、行政、ビジネスの中心として機能しており、日本はもとより世界が注目している最も付加価値の高い地域であると謂われていた時期でもあった。

要するに、国際的にみて最も経済的にも付加価値の高い地域であったにも拘らず、母校学園ひとりが、周りから取り残されていたような海に心細い限りの施設であったと思う。

この時代に取り残されていた学園工学院大学が、周到な事業計画の下に、目を見張る素晴らしい教育環境を創造できたことは、当時の学園当局の先見性、決断力、実行力に限りない敬意を表する以外如何なる賛美の言葉もなく、特に、2年後の平成3年にオフィス棟として、大

学棟と並設された28階建ての超高層エステック情報ビルの完成後に、突如としてバブル経済が破綻して、未曾有のビル不況そして経済不況が起こったことを考えると益々、その感を強くする。

洵に時期を得た再開発であり、今でも学園当局に対して改めて敬意と感謝の念を禁じ得ない。

生まれ変わった新生工学院大学学園は、隣接するオフィス棟と共に、西新宿超高層ビル群の一角を占め、文教地域として機能できる新しい都市型大学として活動を開始したもので、私共校友に取ってこれ程嬉しいことはなかったのである。

ところで、校友会の創設は、1899年（明治32年）に遡る。すなわち、当時の帝国大学総長渡辺洪基氏を中心として1887年工手学校として設立されてから12年後に設立されたのである。

その後、工手学校は、大学を中心にして、附属高等学校、専門学校、最近は、附属中学も創立され、学園規模は、次第に拡大して行くと同時に校友会の組織も数多くの卒業生を擁して順調に発展して来たことは、洵に喜ばしい限りである。

「工業の隆盛を図る学術の応用極めて緊要なり。現今我国の工業稍々気運に向て、これら事業に必須なる技術者を要すること頗る多きに至りし…」という工手学校設立趣意にもあるように、学園教育は一貫して工学実務者の養成にそそがれ、したがって明治、大正、昭和にかけて、数多くの技術者を産業社会に送り出し、我が国産業の発展に少なからず、貢献してきた卒業生は計り知れない。

しかしながら、工手学校は、短期間での専門実務教育の修得を主眼としていたので、多くの卒業生は、当時の

高等専門学校とか大学などと同列に考える人は少く謂わば、当時の中学校や高等工業学校のレベルに近い認識であったためか、最終学歴とする卒業生は少なく、大抵の場合は、さらに上級の高等専門学校や大学に進学していたと思われるので、当時の有名な高等工業専門学校とか国公立大学とか有名な私大を自己の最終学歴として公言されたことに、他意はないと思う。ことに1940年（昭和15年）に工手学校が、青年学校と同等以上であることが認められる時期位まで（ということは、その認定時期は工手学校設立後既に56年という半世紀の歲月経過まで）はその傾向は強かったのではないかと思う。

要するに、数多くの優秀な卒業生を産業界に送り出していたにも拘らず、残念乍ら、工手学校卒業生として社会的貢献をなした人物であるにも拘らず高い社会的評価を得た出身者が余りにも少ないと謂わざるを得ないからである。

私が何故こんなことを書いたかと謂えば、私が卒業（昭和29年大学第3回生工・化）して間もない頃、地方支部の先輩から誘われるままに初めて出席した支部同窓会での会合での自己紹介で、先輩諸氏の殆どが「私は早稲田大学を出まして…」とか「私は法政大学を出まして…」などの発言に終始し、工手学校卒業に関する話題は影に薄れて了い、私は何と自己紹介すれば良いか戸惑った憶えがあるからである。私の最終学歴は「工学院大学」であり、生粋のまじりっ気のない学園卒業生である。推うに、当時の先輩諸氏は、工学院大学校友会というよりも専ら小学校か中学校の支部同窓会に出席したかのような印象を持たれたのかも知れない。

1949年（昭和24年）漸く新制大学として生れた工学院大学も、国立大学中心の当時の社会認識から謂えばまだまだ社会的評価も低い時期であり、先輩諸氏にしても学園の発展こそ期待する処大きいのが、自らが工学院大学の前身である工手学校出身であることを胸を張って公言できなかったのかも知れない。

このように考える時、校友会では会員数を、一応5万人程度を正確な数としているようであるが、潜在的には、その2倍以上は下らないのではないかと考えてならない。

ご承知のとおり校友会は、大学卒業生による四同窓会と専門学校および附属高等学校の二同窓会を合わせて六同窓会の集合組織体である。

附属高等学校および専門学校の卒業生は、必ずしも最終学歴とはならないかも知れないが、大学卒業生は、原則として最終学歴として社会に巣立って行くケースが多い。

工手学校が、工学院と改名されて工学院大学へ昇格して以来、既に49年が過ぎ、大学第1回卒業生も既に古稀を迎えた時代となり、漸く母校学園の卒業生も数多く輩出されて産業界でも母校学園を肩書履歴として立派に活躍され多くの高い社会的評価を得られてきたことは、まぎれもない事実であるが、平成元年新大学棟（高層棟）の完成後、都心型大学として異色の発展を遂げて来た母校学園の目覚ましい発展を見るにつけ、我々校友は社会への貢献を通じてより一層学園への恩返しをすることを忘れてはならないと思う。

また大変嬉しいことに、平成9年度の文部省のハイテク・リサーチ・センター整備事業に、応募した母校工学院大学の発表した最先端研究開発事業が、見事選定認可され、本年4月より「工学院大学総合研究所アドバンスド・マテリアル・センター」として新設されることである。

今迄は、寧ろ教育を専ら重点的施策として来た母校学園が、次世代社会へ貢献する高度先導的な科学技術をテーマとする研究開発への学園的なコンセンサスを得て、産業界へ視野を広げたことは洵に時期を得た革新的工科大学への鮮やかな転身ではないかと感激ひとしおである。

数多くの卒業生を擁する校友会として、この素晴らしい大学の新しいプロジェクトを高く評価すると共に、益々高度化する科学技術の民生利用について、校友企業が抱える多くの技術開発問題についても学園研究機関と協調できる産学共同研究の実を挙げ得る素地がより漸やく生れて来たものと期待できる。

世界の著名な私立大学、例えば米国のMIT、マサチューセッツ工科大学、あるいはスタンフォード大学など先端技術開発と世界の産業経済発展のためにICやコンピュータシステム、そしてそのソフトウェアなど現在の産業界の主流的ビジネスの先導的役割を果して来ているが、本校友会も亦、創立100周年を機に改めて学園研究機関と校友企業との緊密な研究開発の交流を深めて、21世紀へ向けた学園支援と今日の経済不況を脱し得る新技術、新産業の創造に努めるべきではないかと思う。

（昭和29年工業化学科卒）



南太平洋フィジー諸島の集落 ・住居の研究から

工学院大学 建築学科

教授 荻原 正三

1 小さな島からもらった大きなもの

一年半ほど前になるが、「暮らしの手帖」63号(1996年8、9月)山田太一対談シリーズ〈外国体験のある女性と語る〉第2回に本学建築学科卒業生の坂上みつ子さんが登場し、青年海外協力隊員としてフィジーでの2年間に経験したことを語っているが、その対談のタイトルが上記の「小さな島から…」である。

坂上さんは平成2年7月からフィジー高等工業専門学校建築科で建築計画と建築設計を教える一方、首都スバのある主島ビチレブをはじめラケンバ島などの伝統的集落と住居を精力的に訪れ、住民の方々と交流を深め、フィジー固有の風土と歴史を背景とした伝統的集落と建築、さらには住民生活が西洋文明の波に洗われ変化していく姿を見たり考えたりしてきた。



図1 フィジー共和国の諸島と行政区区分

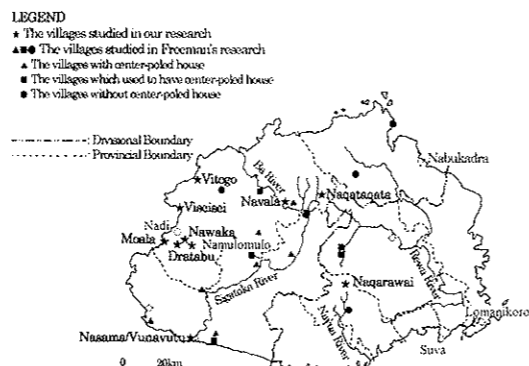


図2 ビチレブ島で調査した集落の位置

その後、フィジーでの経験と考察を踏まえて、「フィジーの農村における環境と開発のあり方」をテーマに本学の社会人博士課程に入学し研究に取り組んでいる。私達の建築計画研究室が坂上さんを中心にフィジー諸島の集落と住居の研究に取り組み始めたのは、以上のようなことが背景となっている。

2 フィジー諸島とビチレブ島

南太平洋の島々、フィジー諸島と言っても北半球に住む我々にとっては位置を含めて輪郭を掴みにくいところが多いので少し紹介しておく。

フィジー共和国はニュージーランドの北2.5千km、ガダルカナル島の東2千km、目付け変更線と南回帰線の交差する所に位置し、百余の有人島からなり、最大の島が首都スバとナンデイ国際空港のあるビチレブ島で約1万平方kmの広さ(四国の

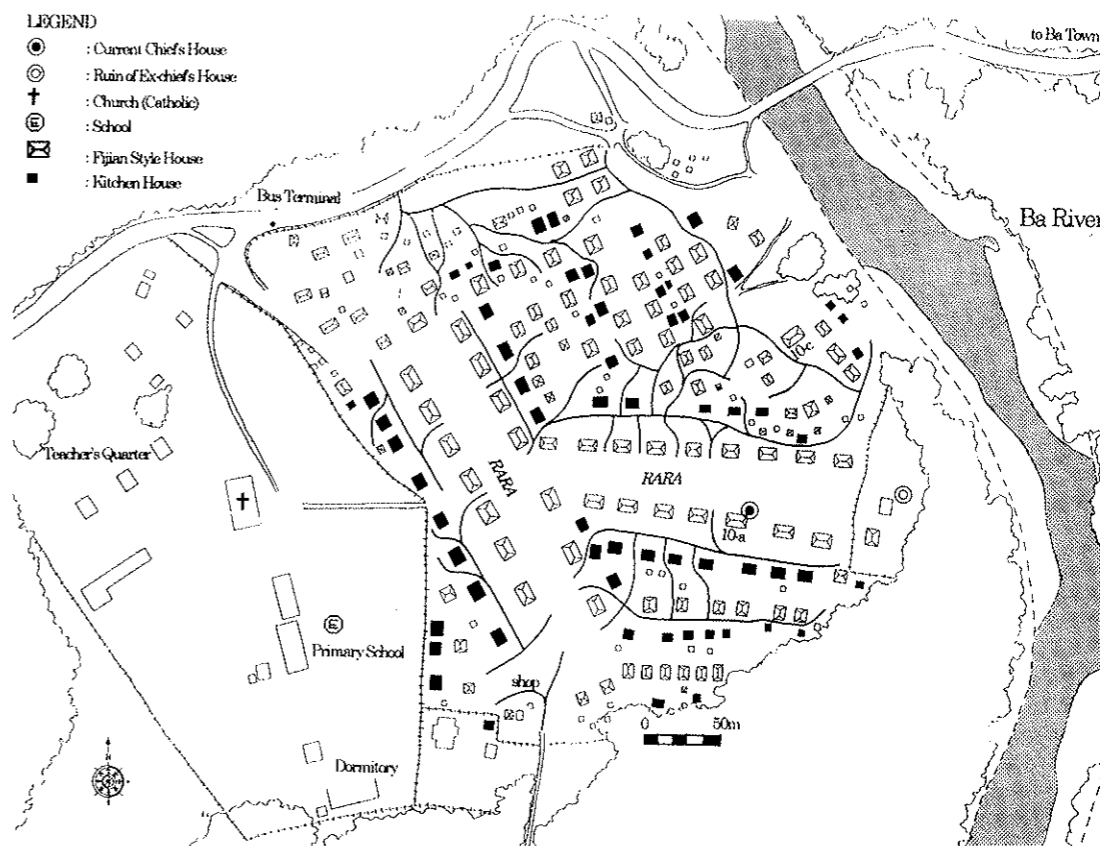


図3 ナバラ集落配置図

約1/2)がある。南太平洋地域は東のポリネシア(ハワイ、タヒチ、トンガ等)、北のミクロネシア(サイパン等)、南のメラネシアに分かれるが、フィジーはメラネシアの東端でポリネシアに隣り合わせており、両者の性格を持っている。

ビチレブ島は火山島で中央を縦に1,200m級の山脈が通っているため、首都スバのある東部は雨が多くショウガとタロイモの栽培に適し、ナンデイ国際空港のある西部は雨が少なくサトウキビ栽培や美しい珊瑚礁の海を生かした観光に適している。気温は年間を通じて15-35度、東部の月間雨量は100-200mm、乾期と雨期がある。

3 山村の伝統を守るナバラ集落

我々が3年間に亘って調査したビチレブ島の農

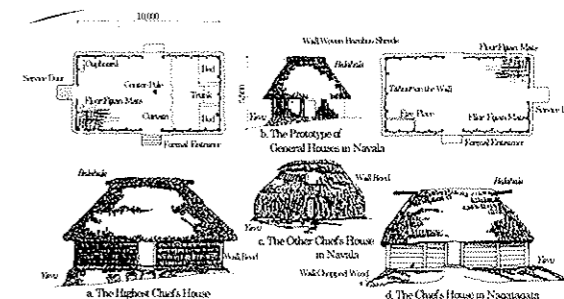


図4 フィジー式伝統住居パレ

山村集落の名称と位置は図2のとおりで、その数は11集落にのぼるが、その中でも比較的詳細な現地調査をした集落は96年のナバラとナンガラワイの2集落、97年のナワカとナムロムロとコマニコロの3集落である。ここでは紙面の都合もあるので、山村集落で伝統的なフィジーの民家様式を守って生活しているナバラ集落と、ナンデイ国際空港

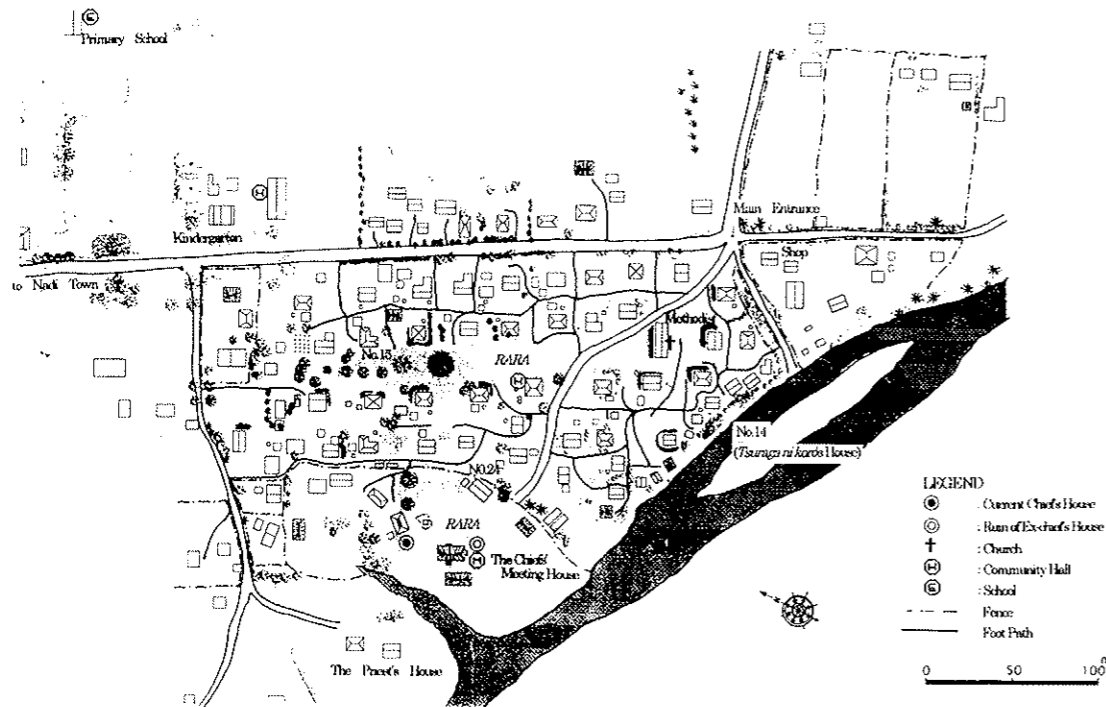


図5 ナワカ集落配置図

に近く近代化の進みつつあるナワカ集落の2集落を例に実態を紹介する。

ナバラ集落は島の北西部のBaの町から車で2時間ほどBa川を遡った山中にある。30年ほど前に2集落が集まって出来た200戸、人口1,300人程の山村集落で、図3で見るようにキリスト教会を頭とする十字架の形に長細い2つの広場(ララ)が交差し、その両側に主な家(バレ)が並び、そのまた裏に台所小屋(図中の黒四角)と簡易トイレと水道・シャワーがある配置になっている。

ナバラの住居は図4と写真でみるとおり、石垣を積んで造られた基礎の上に長方形の平面をもつ茅葺き寄せ棟の伝統的な母屋がのっている。20数本の掘っ建て柱と草葺きの壁で囲まれた室内は8米×10米ほどの広さの一室で中心に棟木まで通る中心柱があり屋根裏がそのまま見える。棟木飾りは地位を示す象徴とも言われている。壁は他の集

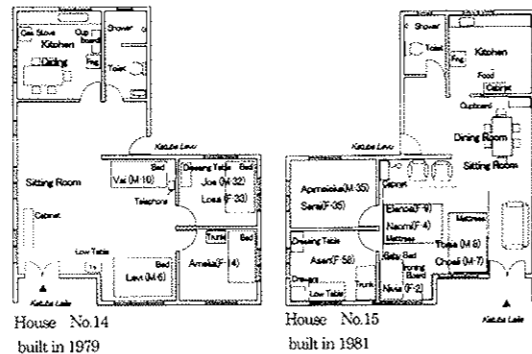


図6 ナワカ集落の住居

落では板壁の場合もある。床は20cmほど乾し草をひき上にタコの木葉を編んだゴザが敷かれている。家具はあまり置かれていない。

4 都市周辺のナワカ集落

ナワカ集落はナンダイ国際空港にほど近い位置にあり、115戸800人の住民の多くが空港関係機関等の都市部で働いているので住民の生活と住居の現代化が進んでいる。集落配置は図5でみるとお

りで、ここでも正面に教会のある細長い広場を中心として両側に母屋の列が並ぶ形をとっている。この家並みから離れた川沿いに伝統社会のリーダーであるチーフ一族の家が並ぶエリヤがある。

ナワカ集落の住居群の中には伝統的なフィジー式バレも依然数棟は残されているが、大半の住居は壁はブロック造、屋根は木造切り妻または寄せ棟トタン葺きに変わり、平面も一室から寝室の分化独立、食堂・台所の付置、トイレ・シャワー室の付設など現代生活に適した形への発展が見られる姿となっている(図6)。

5 海外調査研究の難しさ

海外でこの種の調査研究をすることの難しい点は幾つかある。その一は地元の人々に温かく迎えてもらえるような人間関係を築いていくこと、その二は相手の歴史、文化、宗教、社会等を尊重し



写真1 ナバラ集落

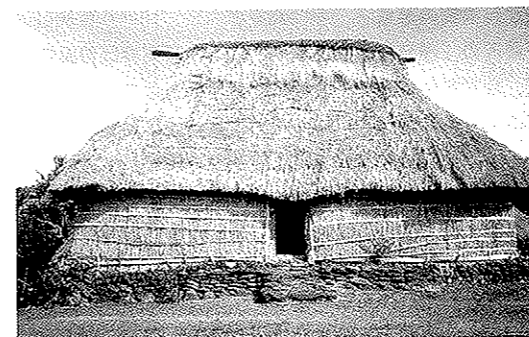


写真2 ナバラ集落のチーフの住居・広場正面

略歴：1932年1月長野県佐久市生まれ、1954年東京大学工学部建築学科卒業、1956年九州大学工学部助手、1963年工學院大学建築学科講師を経て現在教授。評議員。●農村計画学会副会長(1990~92)、農村計画学会学会賞(論文)(1996)●著書「農村土地利用計画論」農林統計協会1993他●海外調査：中国山東省(1983)、浙江省(1984)、広東省(1985)、大連市(1986)、フィジー共和国(1996~97)



写真3 ナバラ集落の子供達



写真4 ナムロム口集落の人々と調査団

大切にす姿勢と考え方をしっかり持っていること、また、広い視野と事前の十分な情報収集により調査研究の目的と方法を明確に伝えること、その三は調査考察の結果を早期になるべく広く関係者に伝え十分意見交換をした上で公表することなどであり、それらは必ずしも海外調査研究に限ったことではないが、調査団として十分にわきまえておく必要がある。

フィジーと言うと新婚カップルの行く青い海と珊瑚礁にヤシの茂る常夏の浜辺という印象を持ちやすいが、一歩中に入って地元の人々とヤングナというお茶のような飲み物を回し飲みしながら話をしてみると、日本では既にあまり見る事のなくなってしまう懐かしい風景と豊かな人々の生活に触れる事ができて、ひとあじ違った印象を持つことが出来たように思える。

● 学園だより



21世紀へ向けての学園

学務・企画担当常務理事 長嶋 秀世

景気低迷の時代において、昨年度は銀行や大企業までもが経営危機に陥り、あるいは倒産し、この傾向は、今年度に入ってもまだまだ続くものと思われます。さらに、大学にとっては、このような経済動向に加え、18歳人口の減少という厳しい現実があります。このような中で、本学は次の21世紀に向けて、確実な地歩を築いていくための施策を着実に遂行しています。

以下に、昨年度のこれら施策を学園の各学校ごとに紹介し、また、特に話題となっている「国際コースの設置」、「八王子校地再開発」、「ハイテクリサーチセンター」について紹介させていただきます。

法人

明治20年に築地に誕生した本学園は、昨年創立110周年を迎えました。これを記念して記念祝賀会・講演会を開催し、また、記念事業、記念写真集の発刊、新聞による広報などを行ないました。また、入学志願者の激減した専門学校の経営を改善するための施策について検討を開始しました。

次に、その概要を説明させていただきます。

◆記念祝賀会・記念事業

学外からの招待者250名の出席をいただき、記念講演会と祝賀会を11月1日に開催しました。この記念講演会は、理化学研究所理事長有馬朗人氏に講師をお願いし、「21世紀の教育」について講演をしていただきました。

また、大学後援会から五千万円の寄付を受け、現在のセミナーハウス敷地に「新松風舎」を建設する計画を実施に移しました。この建物は、学園内の学生を対象とした競技設計を行ない、これに入選した作品を基に、専門家による実施設計を行なうこととしました。なお、この競技設計の作品展、および、入選者の受賞式は学園創立記念日に行なわれました。

◆記念広報

学園創立110周年を記念して「学校法人工学院大学創

立110周年記念写真集」を発行し、関係方面に配布しました。この写真集は110周年を迎えた本学園の現在を取録したもので、後世に伝える一冊となるものであります。

また、創立111年目に入った11月29日、読売新聞東京本社版＝発行部数550万部＝の1頁全面を使用した、学園のイメージ広告を掲載しました。この広告は新宿校舎高層棟を中心に据えたもので、大学を中心とした本学園を紹介しています。

◆学園広報活動

1994年、大学にUI (University Identity) 委員会が設置され、この委員会活動の一環として1996年6月に工学院大学のシンボルマーク・ロゴタイプを制定しました。

このシンボルマーク・ロゴタイプは、当面、大学のものとして展開されていますが、今後は、中・高等学校および専門学校のロゴタイプも新規に制定し、これを学園のものとして位置付け、学園の各学校が印刷物や雑誌、看板類等の広告やステショナリ等に積極的に活用することにより、社会に対する本学園のイメージアップを図る一助としていく予定であります。

◆理科論文の募集

最近の「理科離れ」現象は、日本の産業界は勿論のこと、教育関係機関としても憂慮される問題であります。このような社会問題に対して、工科系大学としての本学が、広く社会に貢献していく活動の一環として、理科論文の募集を開始したものであります。

この募集の第1回は、平成6年に行なわれ、現在までに4回の募集を行ない、全国の高等学校およびマスコミから、高い評価と関心が寄せられているところであります。さらに、この理科論文の募集は、高等学校の文化系クラブの活性化の一助ともなり、延ては理科系進学者の増加にも寄与するものであります。この論文への、現在までの応募状況は次の通りです。

開催年	応募高校数	応募論文数	推薦入学者数
1994	70	95	4
1995	67	79	4
1996	74	85	13
1997	87	102	—

◆理科教室の開催

小・中学生の理科教育振興を企図したもので、実験や観察を体験させることにより、理科および科学に対する理解を深めさせることを目的として開催しています。これは、1994年8月に八王子キャンパスにおいて開催した「第1回大学の先生と楽しむ理科教室」から今年で4回目の開催であります。他大学の理科教室と比較し、本学の理科教室は全国でも最大規模の催しとなっております。

現在、この催しは八王子市をはじめとする多摩地区各市の教育委員会、相模原市、町田市教育委員会等、13の教育機関の後援を受け、学園の広報活動に対しても大きな効果を上げています。なお、現在までの参加人数等は次の通りとなっております。

開催年	テーマ数	参加生徒数	教職員数	予算(円)
1994	54	1,200	250	5,961
1995	100	5,444	511	11,122
1996	64	5,900	545	14,353
1997	64	6,088	621	17,000

◆専門学校経営委員会の設置

ここ数年、専門学校への入学志願者数は激減し、経営上極めて憂慮する状況にあります。この現状を打破し、また、発展させるため、専門学校経営委員会を設置し、総合的な検討を開始しました。

大 学

昭和24年の新制大学制度の発足とともに開学した本大学は、平成11年4月に開学50周年を迎えます。工業立国を担う技術者の養成を目的として創立された本学園は、この50周年に向けてさらなる産学協同の研究を推進し、

その創立目的を達成する必要があります。この目的を達成するため、次にあげるような施策を推進しています。

◆ハイテクリサーチセンターの建設

先端的研究で特色ある成果を上げている私立大学に対し、その分野でのセンター的な役割を果せるよう、文部省が建物の建設を含めて補助を行なう「ハイテクリサーチセンター事業」が1996年度から開始されました。本学は、1997年度にこの補助を受けることができ、これを、開学50周年記念事業の一つとして位置付け、総合研究所の一部としての建物を八王子校地に建設することとしました。この建物は Advanced Materials Center : アドバンスド・マテリアル・センターと呼び、鉄筋コンクリート4階建、延べ床面積2千平方メートルを有し、建築費用5億8千万円の予定で、平成10年3月末の竣工を予定して、現在、工事が行なわれています。

◆新学科の設置

平成11年4月の開設を目指して、既設の第1部電子工学科を「情報工学科」と「電子工学科」に、既設の第1部建築学科を「建築都市デザイン学科」と「建築学科」に学科改編する計画をすすめています。この改編は既設学科の教員組織、施設、設備等を基に、その収容定員の範囲内において行なうもので、現在、文部省私学行政課との事前相談、および、折衝をすすめているところであります。

◆学科名称の変更・コースの開設

化学工学科では、近年、きわめて深刻になってきた環境問題を工学の立場から解決するための「化学工学的手法の開発が急務である」との観点から、平成6年度に地球環境問題をシステムとして学ぶ「プロセス工学コース」と「機能材料工学コース」の2コース制を導入し、対応するカリキュラムの大幅な改訂を行なってきました。この結果、「化学工学科」は、その教育および研究内容から「環境化学工学科」に学科名称を改めることが適切であると考えられるに至り、平成9年4月から「環境化学工学科」に学科名称を変更し、平成9年4月より「環境化学工学科」として新入生を迎えるに至っています。

また、平成9年4月から第1部機械工学科に国際工学コースを開設しました。このコースの開設は日本では初めてのことであります。このコースの特色は、さまざまな分野における工学の基礎知識を身につけさせることにより、アメリカの技術者資格 PE (Professional Engi

neer)の前段階試験として要求されるFE試験(Fundamentals of Engineering)への合格レベルを目指していることです。このため、対応したカリキュラムの新設、英語力強化のための講習を行なうこととし、また、国際情報を知り得る環境を整えるため、CNNインターナショナルニュースを視聴できる設備を設置しました。

◆第2部教育

第2部の教育(カリキュラム等)については、伝統的2部学生とともに、社会人を対象とした生涯学習等もその視野に入れて慎重に検討を進めています。

一方、現状の第2部の運営ならびに教育指導を円滑にすすめるため、また、学生からの要求に応えるための第2部主任制度を設けました。これは、学生の教育指導および学生生活全般、関連する諸問題への指導と助言を、時間をかけて行なうためのシステムとして機能しつつあります。

◆国際交流

国際交流の促進は、大学が国際社会の要請に応えるための重要な課題となっています。このような観点から、本学は、サンチャゴ大学(チリ共和国)との間に、教育及び研究等の学術交流を目的とした協定書を平成9年9月1日、国連大学において締結しました。また、北京航空航天大学との協定書の更新を11月に取り交わしました。

◆自己点検・評価

大学設置基準の改正に伴い、本学は平成5年に「自己評価委員会規程」等を制定し、年々活動目的を設定し、検討を重ねてきた。平成9年度の「第3期自己評価実施計画」の目標(課題)は、

- ①教育研究の理念・目標
- ②教育業績の評価
- ③第三者との相互評価

を定める準備等とし、現在、その作業が進められています。

なお、平成9年度中には「工学院大学白書」を、また、学生向けの情報として「教員プロフィール」を発刊する予定で準備が進められています。

専門学校

入学志願者の急激な減少により、専門学校の経営は深刻な状況となっています。この現状を打破するため、専門学校では次に掲げるような施策を実施しています。

◆現状の改善と将来像の策定

志願者の減少は学科により大きく異なっています。このため、学科を再編し志願者の要請に応えとともに総定員を確保するため、学科の再編を行ないました。また、社会人の積極的受入れを図るため、夜間部を生涯学習機関と位置付けることについても検討をすすめています。

なお、文部省の生涯学習審議会からの提言により、専門学校から大学への編入の道が開かれることも想定し、その対処方法についても検討を進めつつあります。

◆教育環境の整備

技術革新が激しい工学の世界にあって、専門学校の教育も対応を迫られています。このため、最新の設備を揃え、それを利用し、教えることのできる資質を持った教員が求められています。

これを達成するため、コンピュータ室のパソコンを最新のものに更新し、また、各科に最新の機器を導入しました。さらに、教員の資質向上のため、研修会への参加および研究活動を推進する施策について検討を開始しています。

付属高等学校・中学校

◆校地の拡大

高等学校東側に位置する隣接地、約2,400㎡を購入しました。この敷地は、整地して中学生の運動用地として利用しています。

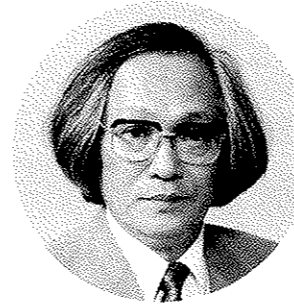
■おわりに

学園を発展させるためには、第一義的には教職員と学生が研鑽し、努力することです。しかし、それ以上に大きな力は卒業生の皆様が広く社会において活躍されることです。皆様が社会において活躍することにより、その母校として、学園のイメージ・その知名度は向上します。

皆様の活躍による学園のイメージ・知名度の向上は、金銭を支払っての広告では得ることのできない、また、比較することのできない大きなものとなり、延いては、在学生の就職に有利に働き、また、受験生の増加にも寄与することになります。

このように卒業生の皆様は、学園の明日を決める大きな存在です。何卒、皆様のますますのご支援とご指導をお願い申し上げます。

●学園だより



中学校・高等学校の将来構想

中学校・高等学校長 城戸 一夫

新学制の施行により昭和23年(1948年)に発足した高等学校は、平成10年(1988年)に創立50周年を迎える運びとなりました。また中高一貫教育の部分的導入をめざして平成8年(1996年)に再発足した中学校は、この記念すべき年に全学年が揃うこととなり、中高一貫教育の体制が枠組みとしては完成することとなりました。平成10年度には、中学校各学年2学級、高等学校各学年7学級、全27学級の編成となります。

明治20年(1887年)以来の伝統を誇る本学園の歩みのその後半において、本校は大学と社会に幾多の人材を送り続けてきました。これまでの歩みを振り返り、今後の時代を生き抜く展望を打ち出すべきこの記念すべき年に先立って、私は昨年「2001年の附属学校……その展望と戦略」と題する将来構想を公表致しました。ここではその一端をご紹介します、今後の本校の発展のための校友各位のご支援を賜りたい所存であります。

①生徒の居場所のある学校へ 過剰とも思われる学校改革論議が繰り返されるなか、不登校や自閉的・反社会的・破壊的行動、学習からの逃避など、学校生活の危機的状況は、現場にいる私ど

もが最も痛切に実感している現実です。程度の差はあれ、本校がそのような状況とは全く無縁であるとは、残念ながら決して言い切れる状況ではありません。学校を制度として改革するだけでなく、生徒の抱えるもろもろの課題を受け止めともに苦しみながら、生徒にとって空間的にも精神的にも居場所であるような学校を築いていく、それを可能とする教員集団の形成がまず先決の課題です。

②「学びの共同体」の復権へ 現在の学校は疲弊し硬直化しています。その原因や責任は、教育行政の画一的統制や教員組合の教条的運動、教師の資質や能力や意欲の欠如、家庭の崩壊や受験の重圧などさまざまな側面に求められます。しかしいずれも原因や責任の一面をつくものでしかなく、この複合的な学校危機の状況を乗り越えるには、学校内部の生命力の回復が何よりも優先されなければなりません。そのためには、学校を構成する全ての人々……生徒、親、教員、校長が、それぞれの立場で自由な創意と活力を最大限に発揮できる仕組みを、現実の条件の中から作り出す方途を作り出す方途が必要です。

③中・高・大の有機的連関の創出を 大学附

属学校にとっての最大のメリットは、ただ単にその附属する大学への進学が有利である点にのみ求められるものではありません。そのより大きなメリットは、中・高・大または高・大のカリキュラムを再編成することによって、中学と高校、高校と大学の教育を連動させ、一貫させることにあります。大学の知性を常時中等教育に反映させ、中等教育の方法論を大学が学ぶこともあり得ましょう。



同時にまた教員相互の積極的な交流によって、学びの共同体の建設が推進されましよう。

④「工学知」の開拓を 工学院大学の附属学校とし本校は今なお工学教育の伝統を守っています。工学教育は本学の伝統を最も正統的に継承していく役割を担うとともに、ポスト・モダニズム、ポスト・インダストリアリズムの限界を超えつつ、近代知そのものを端的に継承する教育でありましよう。近現代の科学技術のありようにはさまざまな側面からの批判がありますが、「人間の顔をしたテクノサイエンス」の基礎を学ぶこと、すなわち中学生の段階からの全ての生徒に対する「工学知」の育成が、高度の科学技術時代を担いあるいはその時代に生きる素養となりましよう。

⑤複線型の高校教育へ 平成11年度(1999年度)から第1期の中学生が高校に内部進学しますが、中学教育における先取り学習の実施上、内部進学の高校生と外部進学の高校生徒とのカリキュラムは自ずと別個のものとなります。一つの附属

学校においてカリキュラム上は異なる教育が展開されますが、これは決して奇異なものではなく、アメリカではかなり普及しつつあるハウス方式と呼ばれる“schools within school”の工学院版と位置づけます。高校における二つの異質な集団の運営には相当な困難を伴いますが、かなりの経費と人材を必要とする総合科的システムの導入の構想が焦眉の課題となります。

⑥その他 平成13年度(2001年度)からの運用をめざして、現在中学校校舎(一部高校との併用)の建設構想が進んでいます。新校舎建設を機として、その構想段階に、総合科的システムの導入に必須の選択教科の増設、共学問題、学校五日制への対応、中学校3学級制など、将来構想を左右する根本的な課題を検討し、解答を出していく必要もあります。東京西郊の、さらにその拠点交通機関より数キロメートル隔たった地にある立地条件という現実を踏まえて、将来構想の実現には今以上の努力が必要となります。

●支部だより

平成9年度は全国34支部において総会が開催され、延べ850名の校友が活動に参加され親睦を深められました。また、永らく休眠していた一部の支部で再出発の気運も活発化して参りました。支部総会を校友同士の情報交換の場として盛り上げるべく、支部長を始めとする幹事の皆様の努力、ご苦勞には頭の下がる思いです。一層多くの校友のご出席を願う次第です。

平成9年度支部総会開催状況 (98年1月20日現在)

4月8日(水)	清水建設支部	7月5日(土)	山形県支部、千葉県支部
4月20日(日)	山口県支部	7月12日(土)	高知県支部
4月24日(水)	日本電気支部	7月26日(土)	東京新宿支部
5月18日(日)	栃木県支部	9月13日(土)	北海道支部
5月24日(土)	岩手県支部	9月27日(土)	青森県支部、兵庫県支部
6月7日(土)	東京中野支部、愛知県支部、大阪支部	9月28日(日)	東京支部
6月14日(土)	宮城県支部、鳥根県支部	10月4日(土)	富山県支部
6月20日(金)	山梨県支部	10月25日(土)	鳥取県支部
6月22日(日)	埼玉西支部、広島県支部	11月1日(土)	新潟県支部
6月29日(日)	熊本県支部	11月8日(土)	大分県支部
7月4日(金)	東芝支部	11月21日(金)	沖縄県支部
7月5日(土)	横浜支部、川崎支部、相模支部、湘南支部、西湘支部	11月29日(土)	福島県支部
		12月20日(土)	京滋支部

平成10年度支部総会開催予定 (98年3月5日現在)

支部名称	月日	開催場所	支部名称	月日	開催場所
山口県支部	4月12日(日)	下関市内予定	熊本県支部	6月28日(日)	産業文化会館
鳥根県支部	5月9日(土)	大田市内予定	東芝支部	7月3日(金)	新宿校舎28F
愛知県支部	5月10日(日)	メルパルク名古屋	千葉県支部	7月5日(日)	グリーンタワーパレス 千葉(旧玉姫殿)
岩手県支部	5月23日(土)	盛岡 労働福祉会館	神奈川県下 5支部	7月11日(土)	ウイング小田原
広島県支部	5月24日(日)	八丁堀 ますみ亭	東京新宿支部	7月25日(土)	新宿校舎
栃木県支部	5月31日(日)	ホテルニューイタヤ	静岡県支部	8~9月上旬	浜松市又は静岡市予定
大阪支部	6月4日(水)	江坂東急インホテル	北海道支部	9月12日(土)	KKR札幌
埼玉県西支部	6月6日(土)	水上温泉藤屋ホテル (宿泊)	東京支部	9月27日(日)	新宿校舎28F
埼玉県中央支部	6月7日(日)	大宮ソニックシティ	新潟県支部	10月24日(土)	長岡 蓮平温泉
宮城県支部	6月13日(土)	仙台 東北電気会館	青森県支部	10月24日(土)	弘前市内
中野支部	6月中旬		長野県支部	11月25日(土)	上田市内
山梨県支部	6月19日(金)	甲府市内	福島県支部	11月下旬	いわき新舞子ハイッ
大分県支部	6月20日(土)	大分 丸福	京滋支部	12月19日(土)	京都市内
高知県支部	6月27日(土)	魚竹			

埼玉県中央支部の設立ならびに、総会開催のご案内

この度、埼玉県中央支部の設立、総会開催を、右記の通り予定しております。懇親・親睦、情報交換および、ネットワーク作りには是非ご参加下さい。また、支部会員名簿の作成も行っております。ご連絡下さい。お待ちしております。

開催期日：平成10年6月7日(日)
対象地域：大宮、浦和、与野、岩槻、川口、蕨、春日部、草加、越谷、上尾、鴻巣、熊谷、行田、深谷、久喜、蓮田、三郷、鳩ヶ谷、戸田、加須、羽生およびその近辺にお住まいの方。
連絡先：黒澤 兵夫(昭和40年電気卒)
住所：〒330-0023 大宮市大和田町1-2164-7
電話：048-685-4272 FAX：048-688-5130

大分県支部の活動

支部長 榑崎 政男 (昭和28年電気卒)

1. はじめに

大分県支部は、昭和47年11月5日参加者10名で設立しました。初代支部長の藤井一氏の呼びかけで戸高章元氏(現副支部長)と私の3人で連絡を取り合う内、日笠佐賀製鉄所に校友が数名居ることが判り会場を準備して頂き、全国で66番目の支部として設立総会を開催いたしました。その後、藤井一氏は15年間支部長を務められましたが、その後を引き継ぎ私が支部長を務めさせて頂いております。大分県からは毎年4~5名が母校に入学し、また、県内の校友の数も現在97名と3桁に迫る状況にあります。

支部総会への参加状況

開催年	会員数	案内数	回収率	参加数
H 6	82名	82枚	55%	19名
H 7	92名	50枚	76%	11名
H 8	94名	50枚	64%	10名
H 9	97名	50枚	60%	6名

2. 支部活動における問題点

本年は、上記の通り出席者6名とさみしい総会になりましたが、初めて参加された方が2名おられ、新宿の昔話等、家庭的な盛り上がりのある会合となりました。

- 1) 案内状の回収率を高め参加者の増加をはかる。
- 2) 若い会員への参加の呼びかけと魅力ある会の企画。
- 3) 大分、別府、県北、県南各地区間の連絡活動促進。
- 4) 会員相互の親睦をいかに推進させるか。
- 5) 名簿の整理と活用。



昭和47年11月支部発足



平成8年11月 大分市 豊後灘にて

3. おわりに

昨年11月をもって大分県支部も満25周年を迎えることが出来ました。これも皆様の熱心なご指導と、ご協力によるものと感謝申し上げます。今後とも学園と共に支部の火を絶やすことなく、灯し続けて行きたいと思っております。

栃木県支部活動報告

副支部長 大根田 晋一郎 (昭和38年電気卒)

国会等移転計画で移転候補地の一つに挙げられている那須地域と、名所日光を有する栃木県は、関東平野の北端に位置し、天災の少ない平穏な海なし県で、保守的な風潮の強い県です。栃木県支部は、故石見末治氏を初代支部長として昭和44年に会員約100名にて発足し、現在は第4代支部長柿木秀氏(昭和32年機械卒)のもと会員数も750名の組織に発展して参りました。

毎年5月下旬に支部総会を開催し、3年前からは総会当日講演会を併催することが恒例となっております。テーマは、工業技術関係に留まらず時節にあったもので会員が興味深いものを選択するようにしております。因みにこの3年のテーマと講師は次の通りです。

- 平成7年度 地産と建築物についての考察 副支部長 青木 光夫氏
- 平成8年度 インターネット今後の応用 校友会本部 松乃 進夫氏
- 平成9年度 日本経済と金融再編について 野村證券 月田 敬夫氏

然し、総会出席者数が例年約40名位で、主催者としては淋しい限りです。そこで、総会のみならず普段の活動も含め活性化を図るべく、平成7年に支部規約を改定しました。改定内容は、県内を地区会と呼ぶ6つのブロックに区分し、地区会ごとに幹事長と幹事(4~5名)を置き、その地区の活動一切を一任することとし、同地域

に居住する会員同志が気軽に交流を深め、活動し易くしました。

その結果、半数の地区会で次第に交流が盛んになり、以前にも増してその活動状況が見えるようになって参りました。これもその地区会の幹事の皆さんの努力のお陰と感謝しております。地区会の活動の例を挙げますと、

- ①新年会 ②お花見会 ③紅葉狩り ④ 鮎狩り ⑤



97. 5.18 宇都宮市内 ホテルニューイタヤにて

一杯飲み交わす親睦会等です。

また、更に交流の輪を縦横に拡大するために、平成9年度秋より各地区会を横断的に趣味を通しての交流を試みましたが、まだ本格的な活動には至っておりません。趣味の会として計画しているのは、

- ①ゴルフの会 ②釣りの会 ③ハイキングの会 ④温泉巡りの会 ⑤スキーの会 ⑥囲碁将棋の会等です。

支部の会員同志が交流を通して視野と知識を広め、知恵を体得して生き生きと自信に満ちた人生を歩めるならば誠に幸いに思います。結びに、工学院大学並びに校友会の益々の発展と充実を祈念いたします。



宇河地区の鮎狩り

青森県支部報告

支部長 工藤 知彦 (昭和52年建築卒)

私が副支部長の外川先生より役目を引き継いでから丸2年が過ぎます。お受けするに当たり次の3つの約束を致しました。

第一 「継続は力なり」(外川先生よりのモットー)を守る。(継続が支部活動の活性化の基と考えます)

第二 夫婦での(又は家族で)支部総会出席を推進。

第三 北海道・岩手県・秋田県など近隣県支部との交流。

青森県支部の特徴は、地方支部らしく?親睦会的性格があります。私自身も毎年の総会が楽しく待ち遠しいという状況で継続されております。支部の運営は、支部を6つの地区に分け、毎年一回持ち回り方式で1泊2日以上の総会を開催しております。以前の総会は交通の利便性から県都の青森市で開催していましたが、日帰りでは情報交換の時間が思うように取れず味気ない総会になったことの反省からなのです。

開催方法等は地区幹事に一任されますが、定番は「話題提供のコーナー」です。会員の研究発表や工場見学、体験などを一時間程度で発表してもらうのですが、非常に興味深いコーナーです。例えば、弘前市の文化財建造物保存設計の発表、雪国の暮らしと建物の形、三菱マテリアルのセメント工場の見学等、非常に面白い話題と内容が毎回出されております。

平成9年度の総会は雪中行軍で有名な八甲田山中のホテルで開催されました。第二の約束通り5組の御夫婦の出席があり、楽しい一時を過ごしましたが、奥様方にも少し心配りをしたほうがよいという反省の声もありました。

岩手県支部の工藤支部長は個人会員として時々出席を頂いております。近隣県どうしの交流をさらに広め、お

互いの支部総会に相互に出席出来るようなルールを作りたいと思っております。

今年(平成10年度)総会は、弘前地区と決まっております。桜の頃か、菊の頃か、はたまた、雪灯籠の頃かと首を長くして連絡の来るのを待っている次第。他県の校友会会員の皆様にも観光を兼ねて、気軽に出席して頂きたいと思っております。お待ちしております。



97. 9.27 八甲田山中 ホテル城の倉にて



92.10.25 下北薬研にて

福島県支部報告

支部長 高村 劫 (昭和37年電気卒)

福島県支部の総会は昨年11月二本松市岳温泉で一泊二日で開催されました。学校創立110周年も過ぎ、支部の会員数も250名に増えております。この程の総会も10年ぶりに開催することが出来、女性会員1名を含む20名が楽しい一時を過ごしました。中でも昭和30年以降の出席率が高く、前回の総会と比較すると若い方が多いようでした。総会後の懇親会でも、学科同志の先輩・後輩の間で先生方の思い出話に華が咲いておりました。今年は11月いわき市新舞子ハイツにおいて総会を開催する予定です。併せてレクリエーション等も企画中です。福島県内の皆様の参加をお待ちいたしております。



97.11.29 岳温泉グリーンピア二本松にて

平成9年度事業報告

平成9年度の主な事業内容は、学園への援助活動、講演会、支部長会、新年懇親会、会報発行およびCD版卒業生名簿の発行を行いました。

本法人の社会的使命である学園に対しての援助活動は、学生・生徒表彰（奨励金）、学園祭補助等、総額254万円の支援を行いました。

講演会は、総会当日に、作家の永井路子氏による「元就の語りかけるもの」という演題で講演をいただきました。NHKの大河ドラマ「毛利元就」が放送中でありましたので、より一層の親近感で拝聴できたものと思います。新年会当日に、本学園理事の内田盛也氏（日本学術会議副会長）による「21世紀に向けて経済的技術立国として生きてゆくため」という演題で講演をいただきました。技術屋として貴重で興味深い内容でありました。本学は経済的にも技術的にも、日本の中心になる使命があると、卒業生に対し、叱咤激励のお言葉を頂戴しました。

支部長会は、9月20日・21日水上温泉で開催されました。総勢38名の参加がありました。自己紹介に時間が取られて、実質時間は少なかったが、今回は一泊であったため、懇親会でゆっくりと話し合いをすることができ、お互いの理解を深めることができたものと思われま。9年度の各支部総会は、1月現在34支部で開催され、総勢

850名の参加がありました。

恒例の新年懇親会は、1月24日新宿校舎28階にて開催しました。学園関係者や後援会役員をご招待し、総勢168名の参加があり、会場に入りきれず、廊下まで使用するほどの盛況でありました。

会報発行は、読みやすい会報の発行を心がけ、充実した内容に努力しております。発行部数61,000部、発送費だけで600万円を要します。その負担対策を考えなければならぬ時期にきております。

平成9年度は念願の全会員記載のCD版名簿を発行しました。CD化には、いろいろの問題点を抱えておりますが、来年度はより良い形にしたいと考えております。希望者は、本部事務局までご一報ください。

平成11年は、本会の前身「工手学校同窓会」発足から100年になります。これを記念して、100周年記念誌を発行するべく、資料集めに奔走中です。会員の皆様にも、古い資料や貴重な資料がございましたら、ご一報くださいれば幸いです。

平成10年3月31日現在、本年度新たに正会員になられた、2,224名（機械334名、応化326名、電気418名、建築365名、高校364名、専門417名）を含め、住所判明の会員数は約61,000名となっております。

平成10年度収支予算書(案)

平成10年4月1日から平成11年3月31日まで (単位：千円) △印は前年度より減を示す

科 目	予算額	前年度予算額	増 減	科 目	予算額	前年度予算額	増 減
1 収入の部				100周年記念引当預金支出	1,000	1,000	0
基本財産運用収入	130	120	10	全国大会引当預金支出	1,000	1,000	0
基本財産利息収入	130	120	10	消耗雑費	50	50	0
会費収入	45,358	45,848	△ 490	管理費	12,810	12,760	50
会費収入(機械)	8,138	8,825	△ 687	総会費	1,200	1,200	0
会費収入(応化)	6,933	7,130	△ 197	本部会議費	1,800	1,800	0
会費収入(電気)	9,755	9,936	△ 181	その他の会議費	2,200	2,200	0
会費収入(建築)	8,390	8,598	△ 208	人件費	5,100	5,100	0
会費収入(高校)	4,836	4,326	510	旅費・交通費	40	20	20
会費収入(専門)	7,306	7,033	273	通信費	500	500	0
維持協力会費収入	3,500	3,000	500	振替手数料	100	100	0
維持協力会費収入	3,500	3,000	500	事務用品費	600	600	0
寄付金収入	50	50	0	消耗品費	60	60	0
雑収入	700	1,350	△ 650	印刷製本費	70	70	0
受取利息・配当	650	1,300	△ 650	修繕費	200	200	0
雑収入	50	50	0	賃借費	280	280	0
収入合計	49,738	50,368	△ 630	対外費	100	100	0
2 支出の部				慶弔費	300	300	0
事業費	27,740	24,050	3,690	公租公課	60	30	30
学生活動援助費	1,250	1,200	50	雑費	200	200	0
学生・生徒奨励金	1,350	1,250	100	資産取得支出	500	500	0
会報・出版費	10,330	10,040	290	基本金繰入支出	0	8,000	△ 8,000
印刷費	2,800	1,260	1,540	特定資産支出	4,600	3,600	1,000
支部関係費	4,360	3,750	610	協力会費引当資産支出	2,000	2,000	0
調査費	200	200	0	会館建設引当資産支出	2,000	1,000	1,000
人件費	5,100	4,300	800	退職給与引当資産支出	600	600	0
特別事業費	2,300	2,000	300	予備費	1,850	1,458	392
全国大会・100周年経費	300	300	0	支出合計	47,500	50,368	△ 2,868

平成9年度収支計算書

平成9年4月1日から平成10年3月31日まで

(単位：円)

科 目	予算額	決算額	差 異	科 目	予算額	決算額	差 異
(収入の部)				(特別事業費)			
基本財産運用収入	120,000	100,082	19,918	百周年記念引当預金支出	(1,000,000)	(1,000,000)	0
基本財産利息収入	(120,000)	(100,082)	(19,918)	全国大会引当預金支出	(1,000,000)	(1,000,000)	0
会費収入	45,848,000	46,545,000	△ 697,000	小 計	2,000,000	2,000,000	0
会費収入	(45,848,000)	(46,545,000)	△ 697,000	消耗雑費	(50,000)	0	50,000
維持協力会費収入	3,000,000	4,119,400	△ 1,119,400	管理費	12,760,000	11,339,632	1,420,368
維持協力会費収入	(3,000,000)	(4,119,400)	△ 1,119,400	総 会 費	(1,200,000)	(821,091)	(378,909)
寄付金収入	50,000	279,910	△ 229,910	本部会議費	(1,800,000)	(1,667,849)	(132,151)
寄付金収入	(50,000)	(279,910)	△ 229,910	その他会議費	(2,200,000)	(2,005,248)	(194,752)
雑収入	1,350,000	1,611,757	△ 261,757	(人件費)			
受取利息・配当	(1,300,000)	(1,500,460)	△ 200,460	給与手当	(4,500,000)	(4,418,620)	(81,380)
雑収入	(50,000)	(111,297)	△ 61,297	福利厚生費	(600,000)	(532,512)	(67,488)
当期収入合計(A)	50,368,000	52,656,149	△ 2,288,149	小 計	(5,100,000)	(4,951,132)	(148,868)
前期繰越収支差額	3,635,816	3,635,816	0	旅費・交通費	(20,000)	(30,260)	(10,260)
収入合計(B)	54,003,816	56,291,965	△ 2,288,149	通 信 費	(500,000)	(520,203)	(20,203)
(支出の部)				振替手数料	(100,000)	(86,713)	(13,287)
事業費	24,050,000	21,440,729	2,609,271	事務用品費	(600,000)	(660,456)	(60,456)
学生活動援助費	(1,200,000)	(1,230,000)	(30,000)	消耗品費	(60,000)	(37,598)	(22,402)
学生・生徒奨励金	(1,250,000)	(1,319,000)	(69,000)	印刷製本費	(70,000)	(68,425)	(1,575)
(会報・出版費)				修繕費	(200,000)	0	(200,000)
会報印刷費	(2,240,000)	(2,455,950)	△ 215,950	貸借費	(280,000)	(256,058)	(23,942)
発送作業費	(830,000)	(552,650)	(277,350)	対外費	(100,000)	0	(100,000)
郵送費	(6,870,000)	(5,197,775)	(1,672,225)	慶弔費	(300,000)	(121,901)	(178,099)
取材費	(100,000)	(49,682)	(50,318)	公 租 公 課	(30,000)	(25,900)	(4,100)
小 計	10,040,000	8,256,057	1,783,943	雑 費	(200,000)	(86,798)	(113,202)
印刷費	(1,260,000)	(2,253,835)	△ 993,835	資産取得支出	500,000	374,850	125,150
(支部関係費)				資産取得支出	(500,000)	(374,850)	(125,150)
協力会費割戻金	(700,000)	(548,250)	(151,750)	基本金繰入支出	8,000,000	10,000,000	△ 2,000,000
支部出張費	(1,700,000)	(1,533,370)	(166,630)	基本金繰入支出	(8,000,000)	(10,000,000)	△ 2,000,000
支部総会費	(700,000)	(271,580)	(428,420)	特定資産支出	3,000,000	4,100,000	△ 500,000
宣伝費	(600,000)	(615,000)	△ 15,000	協力会費引当資産支出	(2,000,000)	(2,000,000)	0
支部関係雑費	(50,000)	(40,000)	(10,000)	会館建設引当資産支出	(1,000,000)	(1,500,000)	△ 500,000
小 計	3,750,000	3,008,200	741,800	退職給与引当資産支出	(600,000)	(600,000)	0
調査費	(200,000)	0	(200,000)	予 備 費	1,458,000	—	1,458,000
(人件費)				当期支出合計(C)	50,368,000	47,255,211	3,112,789
給与手当	(3,700,000)	(3,028,954)	(671,046)	当期収支差額(A)-(C)	0	5,400,938	△ 5,400,938
福利厚生費	(600,000)	(344,683)	(255,317)	次期繰越収支差額(B)-(C)	3,635,816	9,036,754	△ 5,400,938
小 計	4,300,000	3,373,637	926,363				

(注) △印は予算比超過となる金額である。

平成9年度貸借対照表

平成10年3月31日現在 (単位：円)

資産の部	金額	負債及び正味財産の部	金額
1. 流動資産	101,351,224	1. 流動負債	108,202,908
2. 固定資産	168,199,457	2. 固定負債	6,785,600
		3. 正味財産	154,562,173
		(うち基本金)	(20,000,000)
合 計	269,550,681	合 計	269,550,681

平成9年度財産目録

平成10年3月31日現在 (単位：円)

資産の部	金額	負債及び正味財産の部	金額
流動資産		負債	
1. 現金預貯金	87,765,103	1. 一般預り金	105,908
2. 短期有価証券	13,586,121	2. 在学生会費預り金	108,097,000
固定資産		3. 退職給与引当金	3,785,600
1. 基本財産引当預金	20,000,000	4. 長期事業引当金	3,000,000
2. 什器備品	4,311,057	正味財産	154,562,173
3. 電話加入権	102,800	(うち基本金)	(20,000,000)
4. 長期預金	143,785,600		
合 計	269,550,681	合 計	269,550,681

第53回評議員会 第42回総会 開催お知らせ

会長 南雲 芳夫

日時 平成10年5月31日(日) 12時30分～16時
 場所 工学院大学 新宿校舎3F
 0312教室 大階段教室
 議案 第1号 平成9年度事業報告、収支決算報告並びに財産目録承認の件
 第2号 平成10年度事業計画(案)並びに収支予算(案)承認の件

(注1) 本誌に同封の郵便はがきにより、折返し出欠の有無をご回答ください。
 はがきには、50円切手をお貼り下さい。
 (注2) 施行細則第13条により、当該議事について意思表示のない場合は、同意の意思表示とみなして、出席者数に加えることができますのであらかじめご了承下さい。

総会当日のプログラム

受付 工学院大学3F 12時より
 挨拶 会長・学園理事長 12時30分より
 講演 今井 功氏 13時より
 表彰式 退任役員・優秀学生 14時30分より
 議事 総会・評議員会同時開催 15時より
 近況報告 学長・校長
 懇親会 28F 16時30分より

講演 理学博士 今井 功氏

演題 私のコペルニクスの転回

略歴 大正3年10月7日生
 昭和11年3月 東京大学理学部物理学科卒業
 昭和50年4月 東京大学名誉教授
 昭和62年4月 工学院大学名誉教授
 平成2年4月 (学)工学院大学顧問
 平成6年12月 日本学士院会員



昭和26年1月 朝日文化賞
 昭和34年5月 学士院恩賜賞
 昭和54年11月 文化功労者
 昭和63年11月 文化勲章
 平成4年11月 勲一等瑞宝章

平成10年度事業計画(案)

平成10年度の事業は、例年の通り優秀学生・生徒の表彰、学生・生徒活動の援助、支部長会の開催、会報の発行を行います。また、昨年より引き続き100周年記念誌の編纂を平成11年の記念祝賀会に間に合うよう努力します。講演会は、例年の通り、5月31日(日)の総会当日に開催します。

時代の要請として、校友会にインターネットを接続し、ホームページを開設するよう要望があります。現在、プロバイダー(インターネット接続業者)と打合せ中です。

加盟しますとホームページおよびメールサービスを行います。

ホームページのコンテンツ(内容)はいろいろ考えられますが、まずは校友会・学園の行事予定と会報を乗せる予定です。

9年度は、全会員を記載したCD-ROMを発行しました。本年度は、さらにコンテンツの充実を考えております。

お知らせ

表彰(平成9年度総会に於いて)

(1) 感謝状贈呈

東京大会実行委員長 坂田 佳昭

(2) 学生・生徒の表彰状贈呈

種別	学 科 学 年	氏 名	
大 学 院	第1部 機械工学科2年 機械システム工学科2年	北原 穂積 堀越 裕幸	
	第2部 機械工学科2年	佐藤 陽一	
	第1部 応用化学科2年 化学工学科2年	矢野 良治 樋口あゆみ	
	第2部 工業化学科2年	関谷 正樹	
	第2部 電気工学科電気工学コース3年 電気工学科電子工学コース3年 電気工学科情報工学コース2年	山田 貴史 鈴木 道生 菅原 政好	
	第1部 建築学科建築学コース2年 建築学科都市建築 デザインコース2年	江川 香奈 山崎健太郎	
	第2部 建築学科2年	平 舘 功 至	
	工学研究科機械工学専攻 工学研究科工業化学専攻 工学研究科電気工学専攻 工学研究科情報学専攻 工学研究科建築学専攻	伊東 恒 石井 恵子 森田 雅紀 矢作 厚之 山田 重代	
	昼間部 土 木 科 2年 機 械 CAD科 2年 建 築 科 2年	宇津喜牧子 小池大輔 多賀一浩	
	夜間部 電 気 科 2年 建 築 科 2年 応 用 化 学 科 2年	高橋 克己 中井 令奈 堀口ゆかり	
	高 校	普 通 科 2年 〃 2年 〃 3年	大澤 慶輔 村上 貴博 塩 島 敦

訃報 謹んでご冥福をお祈り致します。

名誉会長 月原 貢氏逝く



私たちの大先輩である月原貢氏が昨年12月10日老衰のため99歳の天寿を全うされました。氏は本会の評議員・理事・会長として長年本会を指導され、晩年まで名誉会長を勤められていました。謹んでご冥福をお祈り致します。

月原氏は大正7年工手学校(58回)を卒業、明和製作所(土建機械の製造)を設立、長年社長として活躍され、晩年は相談役を勤めておられました。土建機械は国内および東南アジアの土建業界の機械化に貢献されました。埼玉県や川口市では多くの業界役員の要職を勤められ、昭和43年に勲4等旭日小授章を、昭和53年紺綬褒章を受章されました。

学園でのご活躍は、評議員・理事・監事・顧問としての重責を全うされ、学園の発展に寄与なされました。また、後輩の学生・生徒のため、多額の寄付をなされ、現在月原奨学金として、毎年優秀な学生・生徒に奨学金を贈呈しております。

名誉会員 岡本聖治氏逝く



長年兵庫県支部長を勤められた、岡本聖治氏が本年2月23日63歳で永眠されました。氏は昭和31年短期大学建築科卒業、株式会社アルビートの経営のかたわら、兵庫県支部を指導され、神戸大会では、大変なご尽力で、大会を成功に導かれました。また半年後の大震災にはご自身も被害に遭われたにもかかわらず、会員の皆様に励ましや義援金の配布にご苦労されました。

片庭 重光 昭和57年大建築卒

総建設計株式会社取締役 平成9年5月28日逝去

加藤 正芳 昭和33年大電気卒

前山梨県支部長 平成9年11月8日逝去

村井 巖 昭和12年電工卒

東亜通信工業株式会社創立者 平成9年12月24日逝

受賞



舛井 寛一氏

勲四等瑞宝章受賞

氏は昭和19年工学院造船科を卒業、後に家業であるマスカン株式会社（食肉業）を営み、広島県の食肉業界の役員を勤められ、昭和63年藍綬褒章を受賞された。今回の受賞は食肉業界の振興発展に多大な貢献をされた功績により、勲四等瑞宝章受賞の栄に浴された。

維持協力会費納入のお願い

現在、本会は学園の大学・専門学校・高等学校に入学する学生・生徒からの入会金で運営されています。会員数は毎年増加しますが、入学生は一定です。したがって収入は一定であるが、支出は年々増加してゆきます。そこで収入を増やすため、会員の皆様に維持協力会員になっていただき、会費納入をお願いしています。終身会費を納めていない方は、もちろんのこと、納めた方も、ぜひご協力のほどお願い申し上げます。年3000円以上を納めていただきたいと存じます。この会費は、3割を納入者居住地の支部に還元し、7割は特定積立金として、積み立てています。

校友会 評議員及び監事

会長 南雲 芳夫		監事 大谷 一夫		石成 和男		酒井 史生	
機 械	応 化	電気電子情報	建 築	専 門	高 校		
杉山 助一	片岡 国幸	恒松 一夫	高木 雅行	寺島 敬二	吉岡 一康	◎ 広財事組総企	
渡辺 征一郎	山田 文昭	松為 幸彦	谷口 宗俊	宮阿 正和	太田 雅雅	◎ 広財事組総企	
後藤 弘太	石村 昭雄	大軍 幸彦	岩笠 幸彦	阿部 和建	五十 道幸	◎ 広財事組総企	
藤原 智馨	山下 徹幸	高橋 幸彦	佐藤 順大	梶野 建憲	池田 幸幹	◎ 広財事組総企	
近藤 英幸	西本 利徳	野山 明夫	田西 幸彦	杉中 明一	佐久 治明	◎ 広財事組総企	
瀬戸 多木	吉岡 明夫	横山 聡夫	平野 久一	藤島 忠司	角田 章晶	◎ 広財事組総企	
本青 比奈	朝比奈 利宏	赤松 博治	横山 博治	伊勢 忠司	倉立 章晶	◎ 広財事組総企	
青山 野邦	伊井 久一	猪狩 武健	浅井 光勝	井上 明真	朝倉 剛喜	◎ 広財事組総企	
朝野 正幸	池田 敏一	石井 藤蔵	板井 光勝	内野 昭吉	伊藤 禎雅	◎ 広財事組総企	
伊藤 寿光	上田 憲一	田藤 裕一	大野 昭幸	岡田 正定	今内 雅一	◎ 広財事組総企	
榎本 康雄	小笠原 重二	江崎 裕一	尾高 昭幸	大岡 正潤	因内 隆三	◎ 広財事組総企	
小柳 政一	山原 順洋	藤田 昭幸	海田 幸秀	小笠原 喜生	榎本 友広	◎ 広財事組総企	
大野 三男	菅野 澄彦	水塚 千鶴	亀川 久興	小近 敏利	岡本 和浩	◎ 広財事組総企	
笠原 治雄	小藤 浩行	本野 正弘	北澤 秀正	近藤 敏利	小川 和浩	◎ 広財事組総企	
北村 孝一	佐藤 恒久	竹谷 内男	木賀 文一	佐藤 孝一	谷小 浩和	◎ 広財事組総企	
川島 七五	高村 山珍	寺内 長三	関谷 文一	美知 孝一	住野 平八	◎ 広財事組総企	
田保 久治	長山 昭男	徳長 昭男	高田 文一	美知 孝一	仙石 彰一	◎ 広財事組総企	
松林 光一	西谷 隆男	長嶋 昭男	高田 文一	美知 孝一	土田 彰一	◎ 広財事組総企	
清水 一郎	船越 真隆	中名 昭男	高田 文一	美知 孝一	田見 彰一	◎ 広財事組総企	
関木 忠博	間崎 隆男	取場 昭男	高田 文一	美知 孝一	廣田 彰一	◎ 広財事組総企	
高木 一三	山崎 隆男	村取 昭男	高田 文一	美知 孝一	古木 彰一	◎ 広財事組総企	
中村 三二	吉田 隆男	廣保 昭男	高田 文一	美知 孝一	古木 彰一	◎ 広財事組総企	
坂田 三二	吉田 隆男	廣保 昭男	高田 文一	美知 孝一	古木 彰一	◎ 広財事組総企	
前坂 三二	吉田 隆男	廣保 昭男	高田 文一	美知 孝一	古木 彰一	◎ 広財事組総企	
宮坂 三二	吉田 隆男	廣保 昭男	高田 文一	美知 孝一	古木 彰一	◎ 広財事組総企	
武村 三二	吉田 隆男	廣保 昭男	高田 文一	美知 孝一	古木 彰一	◎ 広財事組総企	
山口 三二	吉田 隆男	廣保 昭男	高田 文一	美知 孝一	古木 彰一	◎ 広財事組総企	
山崎 三二	吉田 隆男	廣保 昭男	高田 文一	美知 孝一	古木 彰一	◎ 広財事組総企	
山吉 三二	吉田 隆男	廣保 昭男	高田 文一	美知 孝一	古木 彰一	◎ 広財事組総企	
米沢 三二	吉田 隆男	廣保 昭男	高田 文一	美知 孝一	古木 彰一	◎ 広財事組総企	

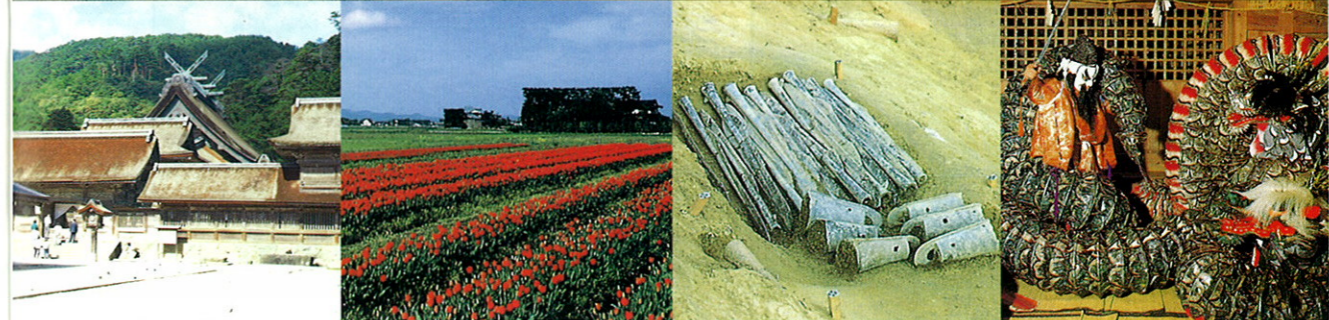
任期:平成10年4月1日～平成13年3月31日

ようこそ
神々のふるさと島根へ



第13回全国大会は、島根県松江市で開催することとなりました。島根ならではの特色を生かした大会にと支部会員一丸となって準備を進めております。ご家族お揃いで、神話の国の観光と自然を堪能してください。

- 開催日 平成11年8月7日(土)
- 会場 島根県松江市

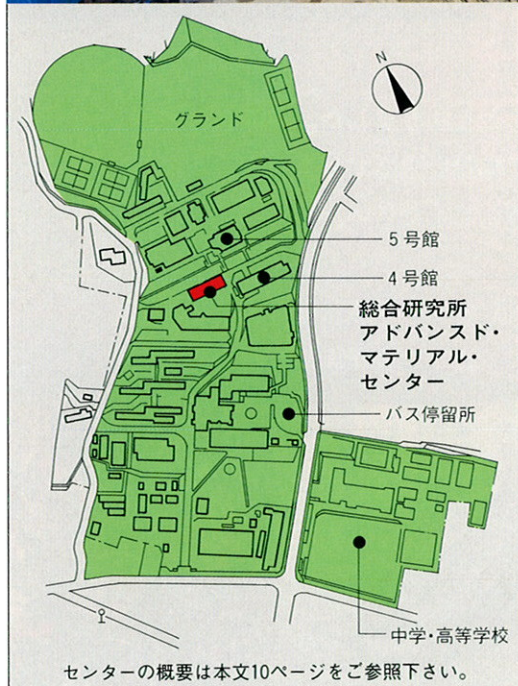


出雲大社 簸川平野 銅剣・銅鐸 石見神楽

総合研究所アドバンスド・マテリアル・センター



環境化学工学科講師 茅野昭氏撮影



編集後記

本号の編集をもって、私達の任務は終了し、次の広報部の人達にバトンタッチすることとなりました。

先ずはこの3年間にわたりご協力頂いた方々に厚くお礼を申し上げます。当初私達が目標とした「読み易く、内容のある」会報づくりも、なかなか思った様には行きませんでした。活字を大きくすることは、原稿量を押さえることになり、今回も依頼した原稿枚数が増えてしまった方が次々と出て、結局活字の大きさを小さくすることになってしまいました。

然し、こんな私達の考えを次の方達が受け継いで頂けたらと思っております。

広報部

榎本忠良、田中博国、関口 勇、岩田俊二、吉岡利幸、椎塚久雄、五十嵐 功、阿部 洵。